
trajectory ~ 頂点を目指して ~

(・ ・)マチュダ...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t r a j e c t o r y 頂点を目指して

【Nコード】

N 5 5 9 0 A

【作者名】

(. .) マチユダ

【あらすじ】

神に特別に授けられた才能と言われ、更に、全野球界のエースとまで言われた天才、神野信護の野球人生を書いた小説です。始めは意味が分からないかもしれませんが、宜しく願います。

1 回表：野球人生の始まり（前書き）

誤字脱字があるかもしれませんが、そこらへんは勘弁して下さい。
長編の予定です。

1 回表：野球人生の始まり

「さあ、今や野球界史上最高のピッチャーになった神野！あと一つのアウトで完全試合達成ですっ！振りかぶって投げました！」

1990年神野信護は宮城県に生まれた。これから8年後神野信護は類い希な野球の才能を見せることになる。

「父さん、何みてるの？」

「ああ、野球中継だよ。ん？もしかして信護、野球に興味があるのか？」

信護の父、勇はとても嬉しそうに言った。「いや、そうじゃないけど……」 「おお、そうか！信護は野球が好きになったか！」
勇は満面の笑みで言葉を続ける。

「よし、じゃあ公園にキャッチボールしに行こう」

「いや無視かよ。俺は別に好きじゃないって言ったんだけど」
そう言っている間に勇はボールとグローブを準備していた。

「って、準備早っ！マジで無視かよ！」

「行くぞー」

信護は勇に引っぱられ公園に行った。

「はああ〜」

半強制的にグローブを付けられ、公園でキャッチボールをしていると、

「おつ、信護は結構肩が強いな。それにコントロールもいい」
「えっ、マジ？」

信護はまんざらでもないようだ。

「うん、マジ。これならどのポジションでも大丈夫だな」

勇はまだ満面の笑みを浮かべている。

「あー、こんなに上手いんならバットを持って来れば良かった」

しばらく無言でキャッチボールをしていると、意を決したように信護が口を開いた。

「…ねえ、野球ってどこに行けば出来るの？」

さつき褒められたからか信護はやる気になったようだった。

「うーん、今の時代はクラブチームとかがあるんじゃないか？」

「ふーん、じゃあクラブチームで野球がしたい！」

「よっしゃ、それなら父さんがすごい良いチームを知ってるから、紹介してやるよ」

勇は今までずっと満面の笑みだったが、信護の返事を聞いて更に笑顔になった。

「よし、明日は日曜だから、一緒に道具を買ってクラブチームに行くか！」

「うん！」

「それじゃあ、帰ろうか。父さん久し振りだから投げ過ぎたから肩が痛い」

勇は苦笑いで肩を押さえ言った。

「えー、もつと投げたい」

「ダメー。父さんの肩もだが、信護の肩も壊れるぞ。それに信護はまだ先があるじゃないか。帰るぞ」

勇は道具を持って公園から出て行くこうとした

「あつ、父さん待ってよー」

信護は急いで道具を片付けて後を追った。

後に神野信護はこう言っている。

『あの日に父が野球中継を見てなかったら、今の僕はなかったでしょうね。』

これが神野信護の野球人生の始まりである。

1 回裏：飛び出せ、若人！

「ここが昨日言ったクラブチームの練習場だ！」

勇が車を運転しながら言った。

「うん……」

信護の返事は弱かった。

「どうした？緊張したのか？さっき道具を買った時は、あんなに元気だったのに」

そう、信護は道具を買った時は今までにない位のハイテンションだった。

「うん……」

まだ信護の返事は弱い。

「はあ、何がそんなに不安なんだ？おっと、ほら着いたぞ。ちょっと父さんは先に行くぞ。監督に話があるからな」

そう言っただけで勇は小走りで監督の所へ行った。

信護はゆっくり車から降りると、重い足取りで何人も練習をしているグラウンドに向かった。

グラウンドには、信護と同じ位の年頃の子ども達が楽しそうにボールを追いかけていた。

信護はさっきまでの緊張を忘れたのか、バックネットにへばりつき見ていた。

その頃、勇は旧友で監督の浅野忠信と再会を喜び合っていた。

「神野、久しぶりだな。大学以来だから、9年振りだったか？どうしたいきなり？」

浅野はびっくりした様子で言った。

「ああ、俺の息子が、野球をやりたいって言ったんだ。それでお前がこのチームで監督をしているって聞いてたから」

「どうせ神野が無理やりキャッチボールさせて、ベタ褒めしたんだろっ」

「いったゝ、相変わらず痛い所を突いてくる、でもよくわかったな。」

「勇はオーバーに胸を押さえた。」

「ふん、俺ん時もそうだったからな」

「えっ、そうだったっけ？…ってそんなことより、俺の息子を入れてくれ！才能はあると思うから」

「ああ、いいけど、ちよつと実力を見るから。どこにいるんだ？」

浅野と勇はキョロキョロと信護を探した。

「ん？もしかしてあのバックネットの所にいる子か？」

「そうだ。」

「名前は？」

ぶっきらぼうに浅野は言った。

「は？勇だよ。知ってるだろう」

「わはははは、違う違う。お前じゃない。あの子だよ。お前の天然は9年経っても治ってないのか」

「あっ、信護だよ。もう、そんなに笑わなくてもいいだろ」

「スマンスマン、ついな」

そう言うつと浅野は信護の近くへ行った。

「うわぁー、楽しそうだなあ。俺もしたいな。」

浅野が近づいてきたのも気づかず、信護はじーっとグラウンドの子ども達を見ていた。

「そんなに野球がしたいなら、私のチームに入ればいい」

「うわっ！びっくりしたゝ。おじさん誰？」

信護はビクツとして後ろを向いた。

「私はこの子達の監督の浅野忠信だよ。もう一度聞くんが、野球がしたいのかね？」

「うん！」

信護は即答した。

「じゃあ、野球は好きかね？」

「うーんと、まだわかんない」

「ほう、ならウチのチームで野球をすれば、きっと好きになる。君は合格だ！」

浅野は信護に視線を合わせて笑顔で言った。

すると、突然浅野の後ろから勇の声がした

「なんだ。そんなのかよ。俺はてつきり信護の野球の実力を見るかと思ったよ」

「あつ、父さん！遅いなあ。待ちくたびれたよ」

「ゴメンな。このおじさんと話してたんだ。でも良かったな、チームに入れて」

勇は信護の頭を撫でる。

「うん！」

「そうだ。道具はあるかい？」

浅野も笑顔で信護の頭を撫でながら言った。

「うん！車の中にあるよ。さっき買って来たんだ。」

信護は自慢げに言って車に取りに行った。

数分後、信護は走って戻ってきた。

「はい、取って来たよ。あつ、もしかして練習するの？」

「いや、今日は少し見るだけだよ。よし、グローブ付けてグラウンドに来て」

浅野はやる気満々らしく、ポンポンとグローブを叩きながらグラウンドに向かった。

「よし！ガンバるぞお！」

信護も真似をしてグローブを叩きながら浅野の後を追った。

2 回表：初打席

信護と浅野のキャッチボールは10メートル位から始まったが、5分後には50メートル以上になっていた。

『ほう、これは勇より肩がいいなあ。これならどこでも出来るな』

「信護、お前はどこの守備につきたい？」

浅野はボールを返しながら言った。

「どこでもいいよ。っていうか、俺は昨日野球を知ったから何も知らないよ」

「本当か？キャッチングが上手いから、てっきり何ヶ月かやってたのかと思った」

浅野はびっくりして手を止めたがすぐに投げ返した。

「知らんなら、今開いてるサードに入ればいい。ピッチャーでもいいがな」

「よし、キャッチボールはもういい。次はバッティングを見よう」
浅野はグローブをベンチに置いて、バットを準備し始めた。

「昌也！ちよつとだけ来てくれ」

昌也と呼ばれた子は小走りで浅野の所に来た。信護よりちよつと大きな子だ。

「なんですか？監督」

「今からこの子に投げてくれ」

「いいですけど、こいつ誰ですか？」

「今日からチームメイトになった神野信護君だ。今度みんなにも紹介するよ」

「へえ、投げてもいいですけど、こいつに僕の球が打てますかね」

昌也は信護を見ながら挑発的に言い放った。

「わからん。信護はまだ野球を知らんからな。多分打てな」
「打ちますよ」

信護は浅野の言葉を遮るように言った。

信護はそう言うのと浅野からバットを奪いバッターボックスに入った。
「ふん、打てるもんなら打ってみろ。じゃあ、本気で投げてやるよ」
昌也は信護に言った後、小走りでマウンドへ向かった。

信護は空振り三振。

「やっぱりこんなものか」

『でも野球を始めたばかりにしては、いいスイングだったな』
昌也は物足りなさげに言って練習に戻っていった。

「クソ！打てると思ったのに！」

信護は野球を知って2日目なのに本気で打てると思ったようだった。

「初めてバットを握ったのに、打てる訳がないだろう。」

それまで黙っていた勇が口を開いた。

「浅野監督、アイツの名前ってなんですか？」

「あの子の名前は早崎昌也で、5年生だ。一応このチームのエースピッチャーだ。信護が打てなくて当然なんだよ」

「えっ？なんで？」

信護は三振したのがよっぽど悔しいらしく、バットを何回も振りながら言った。

「昌也は前の大会で強豪校相手に1失点で抑えたヤツだよ。試合には負けたがな」

「監督、アイツってどこを守らせるつもりなんですか？」

昌也が練習後に浅野に聞いた。

「ああ、言ってなかったか？ サードかピッチャーをさせるつもりだ。まあ結構いいスイングだったよな」

「そうですね。三振はしたけどまあまあのスイングでしたね」

昌也はわざとらしく答えた。

「まあそう言うな。あと少しでバットに当たりそうだったじゃないか。」

「あんなヤツ、次も三振取りますよ。」

「信護、そろそろ家の中に入りなさい」

「嫌、練習しなきゃ早崎昌也も他のピッチャーも打てないよ」

信護は家に着いたらすぐに庭でバットを振っていた。

「マメが痛くないのか？」

「痛いかも……」

信護は振るのを止めて自分の手をみた。マメが2、3個破れていた。

「じゃあ、止めとけ後がキツイぞ。それに眠いだろ？」

「うん、眠い。」

「なら、サツサと、飯食って風呂入って寝ろ。今度から野球をチームでするんだぞ」

勇は珍しく強い口調で言った。

「わかった……」

信護は家の中に入っていた。

その日の夜、勇は妻の佐知子に愚痴を言っていた。

「はあ、信護は先が長いのに、どうして急ぐんだろっ」

「あなたに似たんじゃない？」

「そうかなあ？まあ似たんなら天才になる」

勇はこの一言が将来本当になるとは思ってもいなかった。

2 回裏：チームの一員

練習は信護の紹介で始まった。

「えー、今日からウチのチームに入る神野信護君だ。最初は何も分からないだろうから、みんなが教えてあげるようにな。」

「神野信護です。宜しく。」

信護は軽くお辞儀をする。

「知ってるよ。日曜にまーくと勝負してた子でしょ？」

チームで一番小さな矢野和希が言った。まーくと言うのは昌也のようだ。

「あー、やっぱり知ってたか。勝負には負けたけど結構いいスイングだったんだぞ」

「あつ、そういえば信護って、ポジションどこをするんですか？」
今度はガツリとした体型でいかにもキャッチャーの中原麻夜が言った。

「ピッチャーも捨てがたいが、サードをさせようと思う」

「ええ？サードは茂憲がいるじゃん！」

矢野和希が甲高い声で叫んだ。

「その小さいの、嫌いぞ」

中原麻夜が耳を塞ぎながら、厳しく言った。

「でも！茂憲が……」

和希は最初は声を張り上げていたが、周りの6年生に睨まれているのに気付いたら、どんどん声が小さくなっていった。

「ゴメンな。こいつめっちゃ煩くて。足は速いんだけどな」

優しそうな人が和希の頭をポンと叩きながら言った。

「足だけじゃないよ、守備も自信があるもん！」

和希は頬を膨らませた。

「はいはい、そうでしたね」

優しそうな人は軽く聞き流した。 「そういえば、みんな自己紹介をした方がいいんじゃないか？」

「そうだな。じゃあ、俺から。中原麻夜だ。守備位置はキャッチャーで、6年だ。キャプテンだから宜しくな」

「俺は中原麻夜の弟の剛士。兄貴と同じキャッチャーで3年だよ」
剛士は麻夜とは違って、体の線は細いがプロテクターを付けているからか、痩せているという印象は無い。

「次、僕ね。セカンドの矢野和希です。一番守備が上手いから守備については僕に聞いてね」

「いやいや、一番上手いって言われてるのは、オレだろう。」
背が高いメガネを掛けているガリ勉っぽい人が言った。

「……………」

信護はみんなのテンションの高さに圧倒されていて黙って見ている。

和希は信護の様子に気付いた様だ。

「あーあ。ほら、田中さんが名前を言わないから、信護が戸惑ってるじゃん」

「えっ？あつ、そういやそうだ。オレの名前は田中雅宏でショートをやっている6年だ。そして、守備が一番上手いのはオレだ！」
雅宏はセリフの最後の部分を強調して言った。

「はい、もうコントはいいから。僕はセンターの相川詩緒って言うんだ。宜しくね。名前は詩緒だけど男だから、そこん所も宜しく」
「へえ本当女の子みたいだな名前だ」

信護は思ったまま言った。

だが、周りは真っ青になっている。

「うわー、言っちゃったよ」

と誰かが呟いた。

信護はとてつもなく嫌な予感がした。直後、詩緒が居たはずの場所を見た。

「あれ？」

詩緒はいなかった。実際は居たのだが。別の場所に……

「どこ行つたの？」

信護が一番近くにいた和希に訊ねると、和希はグラウンドの端を指差した。

「どうせ……………だよ……………」

詩緒は和希が指差した先でブツブツ言いながら、地面に8の字を書いていた。

すると、麻夜の弟の剛士が口を開いた。

「気にするな。女の子みたいって言われたら、いつもああなるんだ」

「さつき和希が言ってた茂憲つてのは、サードでバッティングがすごいんだが……………」

自称守備が上手い雅宏が言った。

「どうしたんですか？」

「ケガで入院してる」

信護が訊ねると雅宏が短く答えた。

「俺なんかがそこに入っただけいいんですか？」

信護は遠慮がちに言った。

「いいんだよ。信護は恐らくだか、バッティングがいい。」

浅野が言った。その後も褒め過ぎなくらいの言葉を続ける。

「茂憲も上手いが、茂憲に匹敵する位上手いと思う。それに、肩に関しては、茂憲より強いからなあ」

「でも、茂憲が帰って来たらどうするんですか？」

剛士が皆の疑問を聞く。

「ピッチャーをしてもらう。試合では、最初にサードで、昌也の次に投げてもらいたい」

『浅野は、無謀とは思わないのだろうか』と、誰もが思った。

皆が言葉を失っている、信護が誰も予想がつかないことを言った。

「俺って、2つのポジションしていいんだよ。それって結構面白そう気がする」

浅野は、皆が返事をしないから戸惑っていたが、信護がそう言うのと、とても嬉しそうに、

「だろ？信護ならそう言うと思っていたんだよ！」

「ってうわっ！もう自己紹介だけで1時間過ぎてるよ。皆、早く練習を始めるぞ！」

浅野が腕時計を見ながら言った。

浅野が言つと皆自分の守備位置に散っていった。

3 回表：試合直前

信護の初めての練習が終わった後、浅野は突然思いついたように言った。

「今度の土曜日に試合があるから、今週は毎日練習だぞ」

「ええー。そんなの一言も聞いてねえよ！」

中原兄弟が見事に同じタイミングで文句を言った。

「ああ、全く言っていないからな。何か都合が悪いのか？」

「別に何も無いですよ。ただなんとなく言いたかっただけです」

「

中原兄弟はまたしても一緒に言った。

「ならいい。それと相手は西田小学校だから、気を引き締めて行くぞ！」

「またですか？この前の試合は茂憲以外全く打てなかったんですよ？今回はその茂憲がいないし……」

メガネの雅宏が自信が無さそうに言う。

「打てないと思うから打てないんだ。打てなくても多分大丈夫だ。信護っていう秘密兵器がいるからな」

「西田小学校ってそんなに強いのか？」

信護が和希に質問する。

「うん強いよ。っていうか強いってもんじゃない。あれはバケモノの集まりだよ」

信護と和希が話している間に、浅野の話は終わっていた。

「じゃあ、土曜日は頑張れよ。信護！期待しているからな！」
浅野はそう言って帰っていった。

翌日のグラウンドには信護が投げたボールがキャッチャーの剛士のミットに入る時の音がよく響いている。

「信護、あと一球で終わろう」
剛士がボールを信護に投げながら言うのと浅野が2人の所にやってきた。

「ちよつと待った！まだ信護の球速計ってないから、スピードガンでついでに計るぞ」

「そうですね。多分130キロ位出てると思いますけど、まあやってみましょう」

「早くしようよ！計りたいんだけど」
信護が嬉しそうにピョンピョン飛び跳ねながら言った。

「分かったから、落ち着け」
そう言って剛士はしゃがんでミットを構えた。そして、信護は高鳴りを抑え、渾身の一球を投げた。

ズバン！！！！

今日一番のいい音がした。グラウンドはどよめきが起こった。

「おおー！126キロだ。なかなかだなー」
横からスピードガンを見ていた早崎昌也が言った。
「まあこれなら土曜日でも大丈夫だな」

浅野がウンウンと頷きながら言う。

「もう練習終わっていいよ。あつちで和希が待ってた」

「あ、はい。お疲れ様でした」

信護は昌也に言われて、帰る準備をし始めた。

「遅い！20分も待ったよ」

信護がグラウンドの外で待っていた和希に近づいた時、和希が言った。

「ごめん、球速計ってたから」

信護は手を合わせて謝った。

この2人はかなり気が合い、その上、家も結構近かったため一緒に帰っていた。

「まあいいけど……。何キロだった？」

「170キロ」

「マジ？世界最速じゃん。ってんなワケあるか！」

信護が冗談を言つと、テンポよく和希がノリツツコミした。

「確か、126キロだったと思う」

「ほお、結構速いですな」

「でも、早崎さんは何キロ出るの？」

信護が尋ねると、和希は考えるように、アゴに手を当てながら答えた。

「んーと、5月に計った時に、120キロだったかなー」

「へえ」

和希が言った直後、信護が気の抜けた返事をした。

「それより、土曜日頑張れよ。監督にかなり期待されてるから。」

あつ、もう家だ、じゃあね」

和希は手を振りながら家に入っていった。

「じゃあねー。まあそれなりにガンバるよ」

そして、土曜日になり信護はあまり緊張せずに和希とグラウンドへ向かった。

3 回裏：試合開始

試合前、イワシストロングス（信護達のチーム名）は三塁側ベンチに集まって円陣を組んでいた。

「残念ながら、今回は茂憲はいないが信護がいる。前回の雪辱を晴らそう！」

浅野は監督らしく、激を飛ばす。

「はい！！」

ナインが元気よく返事をする。

「スタメンはサードの信護以外はいつも通りだ。先発する昌也は、7回まで投げてもらい、その後信護が抑える戦法だ！」

「はい！！」

ナインがまた元気よく返事をする。

「じゃあいつてこい！」

浅野のこの一言でそれぞれのポジションに散って行く。

試合は、5回まで投手戦だった。

初回、一番に入っている名前だけが女の子の詩織が俊足を生かし、ヒットを放つが西田小学校のエースピッチャーは後続を抑え、無失点でストロングスの攻撃が終わった。

三番の信護の初打席は三振だった。

「ふむ。あのピッチャーは、ランナーを出すと球が真ん中に集まるようだな」

6回表に西田小学校の監督は、昌也の投球を見て癖を見抜いてばやいていた。

5回まで昌也は毎回ランナーを出しながら、無失点に抑えていた。だが、6回になった直後に打たれるようになった。

そしてノーアウト満塁の場面で浅野がベンチから出てきた。

「しょうがない。信護、交代だ」

「えっはい。分かりました」

信護は浅野に突然名前を呼ばれ、びっくりしていたがすぐに内野手が集まっているマウンドへ向かった。

「誰なんだ！あの子は！この前あんな子は居なかったはずだ！」

西田小学校の監督がベンチで叫んだ。

西田小学校が、信護のことを知らないのを抜いても信護のピッチングは圧巻だった。

満塁のピンチをストレートで三者三振で0点に抑えて、その後もパーフェクトに抑えていた。

「すげえ！てか信護って絶対126キロ以上出てるよな」

キャッチャーをしている中原剛士が言った。

「いや……それが今日の最速は120キロなんだよ。故障かな」

浅野がスピードガンをいじりながら言った。

試合はそのまま0対0で最終回になった。信護は最終回も完璧に抑えた。

「よし！これで負けが無くなったぞ！」

浅野がみんなを励ますように言う。

ストロングスの攻撃は1番から始まる好打順だ。しかし、1番2

番と簡単にアウトになると、最後はいい当たりを放っていた信護に回ってきた。

カキン

信護が打った球はふらふらと、キャッチャーの後ろへ上がった。

パシッ

キャッチャーファールフライだった。

「アウト！……ゲームセット！」

審判が試合の終わりを告げると、信護は地面にバットを投げつけた。

「クソオ！また打てなかった！」

和希がうなだれている信護に近寄って信護を慰めた。

「いいんだよ。今日勝てなくても次があるじゃんか。それに、信護は凄かったし」

「次は完璧に勝ってやる！」

信護は西田小学校のベンチに向かって言った。

「じゃあ、今からすぐに帰ってバッティング練習だ」

「はい！！」

その日の練習は太陽が沈むまで行われた。

4 回表： “緒田茂憲” 登場（前書き）

今まで、名前だけ出てくる茂憲がやっと登場です。試合から一気に2年が経過してます。混乱したらスイマセン。

4 回表：“緒田茂憲”登場

西田小学校との試合からほぼ2年が過ぎて、6年生だった中原麻夜たちは卒業をした。

5年生になった信護たちがいつも通りに練習をしていると、グラウンドに信護が見たことの無い子供が入ってきた。

「おっ！やっと来たか」

浅野がその子に近寄って言った。

「ええ？この子と知り合いなんですか？」

信護が言う。

「ああ。知り合いもなにも信護が来る前のサードだ。ずっと前に言った、ケガで入院してた緒田茂憲だよ。

これで今度からは茂憲にサードに入ってもらって、信護はピッチャーだけに専念してもらう」

「そんなことより、茂憲は今日から大丈夫なのか？」

浅野が急に話題を変えた。

「監督がしていいなら出来ますけど……。医者も完璧に治ったって言ってますし」

「じゃあ、少しだけ打っていけ」

浅野はどこからかバットとボールを出して言った。

「オイ。信護が相手してやれ」

浅野は信護にボールを渡して、茂憲と一緒にバッターボックスへ向かった。

「じゃあ、この前の学校みたいにしてやる」

信護は茂憲を挑発するように言った。

少し前の試合で信護はアウトを全て三振で打ち取っていた。

「ん？良く分からないけど、やってみな」
茂憲は信護の挑発を軽く流した。

ガキーン

1球目ファール

ガキーン

2球目は3塁線へ特大ファールだった。

「もうツーストライクだぞ。あと1球！」

信護が今までにない位に力を込めた直球を投げた。

ガキーン

それからは特大ファールが10球以上も続いた。

「ハアハア……もう……いいだろ……三振しちまえよ」

信護は肩で息をしている。一方、茂憲は涼しい顔をしてファールを連発する。

『そろそろだな』

浅野がそう思った直後に茂憲のバットを持つ手に力が入る。

カキーン

ボールはグラウンドの周りに張ってあるネットを超えていった。

信護は口をポカーンと開けてボールの行方を見ていた。

「マジかよ……」

「ああ。マジだな」

茂憲が苦笑いしながら言う。

「……………」

「オイオイこれ位で野球をやる気無くすなよ」

浅野が信護の肩に手を軽く乗せると突然、信護が立ち上がった。

「ヨッシャ！もう1回だ！」

「……は？」「……」

浅野と茂憲といったの間にか出来ていたギャラリィは、声を合わせて信護のポジティブさにびっくりしている。

「いやいや、だからもう1回勝負だよ。ほら、バッターボックスに立てよ。次こそ本気だせよ！出さねえと死ぬまで呪ってやるからな」

茂憲は仕方なくバッターボックスに入る。

「ていうか、本気出してないのが分かってたのかよ……。しょうがねえなあ」

1球目と2球目はさっきと一緒だった。

だが、3球目もさっきと一緒だった。信護の表情を除いてその状況で、信護は笑っていたのだ。

そして、信護が4球目を投げると、茂憲は今までと同じタイミングでバットを振った。

信護以外の全員がバットに当たってホームランだと確信していた。

ズバン！！

だが、茂憲は振り遅れてバランスを崩して倒れた。

ボールはバットに当たらずに、キャッチャーミットに収まってい

た。三振したのだ。

「マジかよ……。そんなの有るかよ。球速がまだ上がるなんて」

「ふふっ、切り札は最後までとっておかなきゃね」

その後のグラウンドは信護と茂憲の勝負の話しで持ちきりだった。

「信護の最後の球は凄かったなあ」

と誰かが言っていると話しは止まらなかった。

「だよーね。それに、最後のセリフもカッコ良かったし」

「そうそう、“切り札は最後までとっておかなきゃね”だって。

僕、マジで鳥肌が立ったもん」

そこで、顔を真っ赤にした信護が話を止めさせようとする。

「うわー！ 恥ずかしいから止めて！ あのセリフ言った後に、自分でも後悔してるんだから」

「えーっ、じゃあ別の話題ね。あっ、それに茂憲の三振も見事だったよね！」

和希は懲りずに、先ほどの勝負を話す。

「うん、あれ以上の三振は無いっていう位の見事な三振だったなあ」

茂憲も話を止めさせようと、真っ赤になりながら、間に入る。

「その話も止めてよ！ っていうか、もう勝負の話は禁止！ もう信護、あつちでキャッチボールしよ」

茂憲は信護を連れてグラウンドの端に走っていった。

4 回裏：1 個目の頂点（前書き）

11 日ぶりの更新ですね。4 回裏は少しコメディチックに仕上がってます。浅野監督が壊れますが、気にせずに読んで下さい。

4 回裏：1 個目の頂点

日曜日のグラウンドには、織田茂憲がバットにボールを当てる音、神野信護がボールを投げてキャッチャーの中原剛士のミットに入る音、そして、それを見に来ているギャラリーの声援が響いている。

3 日前、監督の浅野がノックの途中で突然大声を上げた。

「ああー！！」

浅野の大声にグラウンドでいつものように、練習をしていた皆がびっくりしている。

「いきなりどうしたんですか？ 監督」

キャプテンになった早崎昌也が代表して浅野に尋ねる。

「昌也か。いやあヤバいことが起こったんだ。ちょっとだけみんなを集めてくれ。大事な話がある」

「えっ、ハイ、分かりました」

昌也はそう言つと、息を思いつ切り吸った。

「集合！！」

昌也の声がグラウンド中に響く。

集まるとみんなワケが分からないという顔をしていた。

「一体全体、何なんですか。びっくりしましたよ」

最後に来た相川詩緒が言う。

「ヤバいことが起きた。みんなこれからオレが言うことをしっかり聞いてくれよ」

浅野の周りに集まった信護以外のみんなは、息を呑んだ。

「先に謝っておくけど、3日後から大会が始まること言うのを忘れてた スマン」

浅野は悪気が無さそうに言うと、一斉に周りから怒号が飛ぶ。

「いやいや、浅野監督はなんでいつも大事なことを忘れるんだよ！この前も似たようなことがあったじゃんか！」

「「そつだそつだ！茂憲の言う通りだあ」」

和希と詩緒が揃って言った。

「忘れてた じゃねえよ！オレ達何も準備出来てないですよ！」

「「そつだそつだ！剛士の言う通りだあ！」」

次は、茂憲と昌也が揃って言った。

「だから、謝ってるじゃないか。大丈夫だ。相手は弱いから今から準備すれば、間に合うぞ」

その言葉に剛士がうなだれる。

「ハア……そういう問題じゃないです。信護はどうするんですか？アレを見て下さいよ」

剛士はグラウンドの周りを指差した。

浅野はゆっくり周りを見た。

「アレね。アレはシカトしておけばいい」

剛士が指差した先には他の小学校から来たスパイや私立中学校のスカウトがいた。

「スカウトはいいとして、スパイのせいで本気で投げられないんですよ？」

「ふーん。まあ問題無いだろ？ 信護」

「ハイ。スパイが来ても、絶対に打たれない自信がありますし、オレは私立中学に行く気は有りません。」

信護はスパイやスカウトに聞こえるように大きな声で言った。

「だってよ。どうする？ 剛士」

信護の言い方に浅野は苦笑いだ。

「信護がそう言うならいいですけどね……」

そして、日曜日。いよいよ大会がやってきた。

試合は、2試合とも完封勝ちだった。（実は、信護達は1試合と思っていたが、これも、浅野が言い忘れている）

1試合は信護が先発でもう1試合は昌也が先発だった。

そして、2試合ともコールド勝ちで、信護と茂憲がサヨナラホームランを打った。

「よし。よく勝った。みんなで焼き肉でも食いにいきたいかー！
！」

浅野は高校生クズのノリで言った。

信護達は笑いながら顔を見合わせ、答える。

「「「オーツ！！」「」」

「どうでもいいけど、アレは絶対酔い過ぎでしょ」

浅野は焼き肉屋で、

「お前結構可愛いなあ。好きだ！」

と言って男の店員にキスしようとしている。

「アレはさつき日本酒をイッキ飲みしてたよ。あんな大人にならないように気を付けような」

「そうだね。でも一時はどうなるかと思ったよ」

「オレなんて、大会出場辞退も考えたぜ。って、うわっ！監督？
信護と詩織が話していると、いきなり顔を真っ赤にした浅野が絡んできた。」

「オ。イ。その美少年達い。何話してんだあ？オレも混ぜてくれよう」

「うわっ、酒クセエ。バカオヤジはあっちで寝てろよ」

2人は鼻を摘んで、後ずさりした。

「監督なんか置いて、もう帰ろうぜ」

信護は浅野を足で蹴りながら言う。

「そうだね。みんな、もう遅いし帰ろーか」

それから、数時間後

「お客様、もう閉店時間ですよ。起きて下さい」

「煩いなあ……ZZZZ……」

「起きて下さいよ」

この後、焼き肉屋の店長が浅野を起こすことが出来なかったのは誰も知らない。

5 回表・中学校入学（前書き）

……スランプでした（ ） b

5 回表：中学校入学

信護達は焼き肉屋での打ち上げ後の試合では、大会記録を作りながら、順調にそして圧倒的に勝ち、優勝した。

翌年は、信護達は1回戦の試合で負けた。楽に勝てる相手だったが、大事な場面でエラーが連発して、惜しくも1点差で涙を飲んだ。そして信護達は中学生になった。

信護、剛士、和希、茂憲、詩緒の5人は入学式が終わった後、中学校の屋上に集まっていた。

「みんな同じ学校だけど、信護以外、みんなクラスが違うね……」
春休みの間で背が伸びて、別人のようになった和希がボソツと言う。

「いいじゃんか。学校が一緒なんだから。それに、野球部に入るんだろ？いつでも会えるさ」

これまた大きくなった信護が、和希の肩に手を置き、慰めた。

「うん……。だね、会えるよね。みんなで野球部に入って大会で優勝しようね！」

「ああ……。そうだな。って詩緒っ！そこは危ないぞ！戻ってこい！」

詩緒の言葉に返事をした剛士が、屋上のフェンスを乗り越える詩織を見た途端にマイクを使ったかのように、大きな声を出した。

屋上のフェンスの向こう側に座った詩織は、一瞬目を見開き、ため息をつく。

「大丈夫だよ。落ちないから」

「で、で、でも万が一落ちたら……」

剛士は落ち着かない様子だ。

「落ち着け剛士。だが剛士の言う通りだ。戻ってこい詩織。もし、先生に見つかったら野球部がヤバいかも……」

茂憲が剛士の助け船を出す。下から怒声が聞こえたのは、その直後だった。

「コラァー！屋上で何しとるんだ！死にたいのかァー！」

詩緒は、試合では見せない速さとジャンプの高さで、フェンスを越えてきた。

そして、ビビっていた剛士は下から声が聞こえた瞬間には、階段へ向かっていた。

「ヤベツ、教頭の秋山鉄太郎だ！みんな逃げるぞ！」

詩緒の姿が見えなくなっても秋山は下から、臆病なチワワが吠えるように声を張っている。

「お前の名前は何だァ！そこに行くから、逃げるなよー！」

この状況で、逃げるなど言われて逃げないはずがなく、秋山と応援の先生達が屋上に着いた時には、信護達は、既に学校の外に出ていた。

「あつぶねーなァ。だから言ったじゃん。止めとけって」

剛士が額の汗を拭いながら、詩緒を指差す。

「むう。だって景色が良かったんだもん」

「オイオイ。だもん、じゃねえよ。マジで危なかったんだぞ！」

「まあまあ、大丈夫だったんだから良しとしよう」

顔真似して少し怒った剛士を制して茂憲があいだに入った。

5人が入学した朱佐多中学校の野球部はあまり強くないが、校長が野球好きな為グラウンドなどの施設内は充実している。

学校のグラウンドとは別にグラウンドを作ったほどだ。

5人は野球部グラウンドに移動していた。

「あ、グラウンド着いたよ。やっぱり広いねえ」

「そうだね」

和希の感想に生返事する信護。信護はニヤニヤしながらカバンを漁っていた。

「ニヤニヤして何探してんの？エロ本？」

と、剛士が信護をちやかすが信護はカバンを漁り続けている。

「エ、エロ本なんか持ってないよ。ジャーン！これなんだ？」

4人は信護が出したものに注目した。

「何これ？新聞かな？」

信護がカバンから出したのは少し古い地域新聞だった。

「うん。新聞だよ。１７年前のね。ここにある小さな写真が父さん。昔、朱佐多中学で父さんは野球部を作ったんだ」

5 回表：中学校入学（後書き）

次は信護父の勇の過去です！

ゞ（ ）またね

5 回裏：父 勇の過去（前書き）

書くのに2、3ヶ月もかかったやいました
—
—
—

5 回裏：父 勇の過去

信護の父、勇は信護が入学する19年前に朱佐多中学校に入学した。

幼少の頃から野球選手を目指していた勇は中学校に上がっても野球部に入ろうと思っていた。

そして入部届けを出す為に、職員室に向かった。

「ええっ！この学校って野球部無いんですか！？」

職員室に勇の声が響く。

運悪く職員室に居合わせた先生達はびっくりして耳を塞いだ。あまりにもびっくりして椅子から落ちた先生もいた。

「うるさい！えっと名前は確か神野だったな。そのくらいパンフレットに書いてあっただろう」

担任の秋山鉄太郎は耳を塞ぎながら言った。

「すみません。パンフレットなんかあったんですか？」

「一応な。ま、野球部が無いんなら作るしかないよ。頑張れよ」

秋山は面倒くさそうに言うと言席を立ち職員室から出ようとす。

「ちよっ、ちよっどこ行くんですか」

「どこって帰るんだよ。じゃあな」

勇が慌てて引き止めるが秋山は逃げるように去って行った。

・
・
・

その後、勇はブツブツ文句を言い下校していた。

「ハア……何であんなに大人は無責任なんだ。手伝ってくれてもいいじゃないか。ん？」

ちようど空き地にさしかかったとき急に勇の足が止まった。

そこはド　えもんに出てくる空き地のように土管などは無く、イチヨウの木だけしかない綺麗な空き地だった。

「ふーん。こんなとこに空き地なんてあったんだ。ヨッシャー！ちようどいい。壁当てでもするか」

勇は毎日持ち歩いているボールとグローブを出して、元気に壁当てを始めた。

しかし、30分程すると壁当てを中断して休憩する為か隅にあるイチヨウの木に向かって歩きだした。

「一人で野球はつままないなあ。探さない」と

勇はその木に向かってボールを投げた。

しかしその木の陰には人がいたのだ。

「あ。外れちつた」

ボールは木から少し外れ、一直線に隠れている人物に飛んでいく。

「って、人いたのかよ！危ねえぞ！！」

勇はボールが当たる瞬間に目を逸らした。

「うわっ × @ ！！」

その人物は意味の分からない言葉を叫びながら、手で頭を庇う。

……パァーン！！

ボールがグローブに入る時のいい音がした。

そこに居たのは勇と同年くらいの少年だった。

そして、ボールが当たったと思った瞬間に少年はグローブでボールをキャッチしたのだ。

「……はあ？グローブ持ってたのか。良かった」

勇は額の汗を手で拭いながら言った。

「でも、何でそんな所に居たんだけ？キャッチボールがしたいんなら言えばよかったじゃん。キャッチボールしようぜ」

少年はボールが入ったグローブを胸の前で抱き締めて、俯いている。

「野球しよう！！」

少年は決心したように息を吐いた。

「ぼ……僕……野球したこと……ないけど……いい？」

少年の言葉はとてもか細い声だったが気持ちは籠もっていた。

「いいに決まってるんだろ。野球は片手しか動かない人でも、下手な人でも、極悪人でもやっていいんだからね」

勇は笑いかけながら少年の手を握った。ボールが落ちて地面で跳ねる。しかし2人はそれに気付かないようだった。

少年は勇の一言で右頬にエクボを浮かべて笑った。とても印象的な笑顔だった。

「フフツ。ちょっと大袈裟過ぎだよ。僕は浅野忠信。これからよろしく」

「俺は神野勇。よろしく」

2人はその後、朱佐多中学校には無かった野球部を創り、沢山の大会で優勝をしていった。

ということだったんだ。んで、優勝の時に取材が来たんだって、父さんが言ってた」

「要するに、朱佐多中学の野球部は信護の父ちゃんが作ったと……」

茂憲がワザと言葉を最後まで言わずに切って質問した。

「うん。そういうこと。最近の野球部は弱いけど、俺たちでまた強くしよう！」

信護は拳を握り締め空へ振り上げた。

「そうですね。でも、強くするだけではなく日本一を目指しましょう」

突然5人の背後から声がした。

5人は声の主を一斉に振り向いた。

その光景は、5匹のプリーリードッグが警戒して遠くを見渡しているようだった。

「……………あんだ誰？……………」

見事なタイミングで同じ言葉が重なる。

声の主はぺこりと頭を下げて質問に答えた。

「失礼しました。私の名前は勅使河原 閃と言います。守備位置はショートです」

勅使河原 閃と名乗った人物は雑誌からそのまま出てきたような整った顔をしていた。髪の毛は漆黒で、これまた雑誌から出てきたような今風の髪型をしている。

その上、背はここにいる6人の中で一番高く、180センチはある

だろう。

誰もリアクションを返さないの、閃は困った顔で一番近い和希に手を差し出した。

「宜しく願います」

「あ、宜しく願いますです」

和希は突然のことで混乱して不自然な敬語になってしまっている。

閃以外の5人は閃の動作ひとつひとつで全く同じ感想をもった西洋の貴族だ　と。

ふと、詩緒の頭にひとつの疑問が浮かんだ。

「えっと……勅使河原さんは何年生ですか？」

「ん？私は1年生ですが何か？」

「エ……マジ？」

「うわぁ……」

「うぉおい！詩緒しっかりしろ！」

「「同い年かよ！」」

その言葉に一人でグラウンドに入ろうとしていた剛士の動きが止まり、詩緒が倒れそうになり、信護は詩緒を支え、和希と茂憲はツッコミをいれた。

「フッ。さて、野球部の先輩方に挨拶してきましょう」

6 回表：未来への布石（前書き）

超珍しく2日連続の投稿です。

6 回表：未来への布石

まだ4月だというのに、暑かった。

グラウンドには空からの容赦ない太陽光が燦々と降り注ぎ、土のすぐ上には陽炎が揺らめいていた。

グラウンドから見える遠い山々の更に遠くには巨大な入道雲があった。

その暑い中、グラウンドではバットを振る音や野球部の元気な声が響いていた。

朱佐多中学校の野球部は伝統で入部テスト的な体力テストがある。50メートル走に始まり、遠投、持久走をして、野手はバッティングと守備を投手はピッチングをした。

信護たちと同じ年に見えない閃は足が速く守備も上手く、更にミートも上手かった。

ピッチングの時に127キロを出した信護は先輩と監督に目を付けられたようだった。

「アイツは誰だ？」

と、監督が隣に立っているマネージャーのような人に聞く。

「神野信護ですね。小学校時に県大会まで進んでいます。あ、そのメンバーはほとんどウチに来てますね。さっき出た127キロが自己最速で、県大会では打率6割で防御率は0点台です。ノーヒットノーランを3度ほどしてます」

マネージャーのような人はファイルを捲りながら答えた。

「ほお……神野！あと10球投げてみる」

「はい」

信護が言われた通り10球投げると、すぐに監督が近寄ってきた。

「神野。お前はちょっとだけフォーム調整するだけで球速が上がるぞ。キレも出るようになる。してみるか？」

「ええっ。マジですか？出来るならやりたいです！」

「OK。神野の悪い所は3つだ。まずお前は腕だけで投げている。全身を使って投げる。やってみる」

監督は投げるジェスチャーをしながら、話す。そしてボールを投げ渡した。

「全身って……？」

信護は混乱して首を傾げた。

「自分で考える。2つ目は出来るだけ体勢を低くして投げる。その為には強靱な下半身が必要だ。

3つ目は投げる瞬間に体が傾いている。だからボールに威力が伝わってない。

2つ目と3つ目を直す為には走れ。走って走って走りまくれ。走れば下半身が安定する」

信護はそう言われてすぐに家の近くの地図を頭に浮かべた。しかし

走る場所が見当たらない。

「走るってどこを走ればいいんですか？近くに広い公園は無いですよ」

「普通の道路でよからう。犬を飼ってれば散歩ついでに走れ」

「え〜？犬なんか飼ってないっすよ。道路で走ってたら襲われちゃいます」

実は、信護は持久走が苦手だったのだ。だから、どうにかして逃げようとしていた。

すると、監督の鉄拳が飛んできた

「ばか者！そんなでは強くなれんぞ！場所が無いなら学校で走ればいい。儂が直々見てやる。毎日朝5時だぞ」

信護は脳天に鉄拳を受け、悶絶していたが監督の一言で顔を上げた。

「はあ？マジかよ。ぜってえイヤだ」

「ふん。もう決定事項じゃ。だが、そんなに走りたくないなら……」
「なら？」

信護は最後の希望に賭けて目をキラキラさせる。どん底に突き落とされるのを知らずに。

監督は子供のような満面の笑みを浮かべ、言った。

「夕方の練習が終わった後も走っ

「うわ。はいはい！学校を朝だけ走らせて頂きます」

信護は次の言葉がイヤな予感がして、監督のセリフを途中で遮った。

「決まりだな。明日から毎日朝5時に学校集合。遅れたら　だか
らな。連れて来たい奴が居れば連れて来ていいぞ。じゃ、他の奴も
見ないといかんから、さっき言った事に注意して頑張れ」

信護はグラウンドの端のマウンドに一人だけ残された。

「はぁ……」

（えっと、全身って？誰かに訊いてみよ。出来るだけ低くか……こ
れならできそうな気がするなあ）

信護は心の中で言われた事を思い出してみた。そして、小学校から
バッテリーを組んでいる中原剛士を呼んだ。

「つーよしー！ちょっと来てー！緊急事態発生ー！」

剛士はノックを受けていたが、直ぐに飛んできた。

「どうした？何があつたんだ？」

「ん？特に何も無いけど、投げたいからあっち座って？」

剛士は肩を上下させて、心配そうな声を出す。

しかし信護は悪気も無さそうに返して、キャッチャーボックスを指
差した。

「何だよ。そんなことかよ。心配させんな」

と、いいながら剛士は素直にキャッチャーミットを構え、ボールが
来るのを待った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5590a/>

trajectory ~ 頂点を目指して ~

2010年11月18日14時53分発行